

- 30) 浜崎悟司 「矢倉川口遺跡出土の小銅鐸について」 1985.  
資料の入手にあたっては小竹森直子氏にお世話になった。
- 31) 註24に同じ
- 32) 新藤晃一 「下市瀬」「中国縦貫道建設に伴う発掘調査 1」 1973.
- 33) 清水真一 「鳥取県東伯郡羽合町・長瀬高浜遺跡出土の小銅鐸について」 『考古学雑誌 68-1』 1982.6.
- 34) 鈴木・渡辺 「福岡県筑紫郡春日町弥生遺跡出土の銅鐸」『日本考古学協会25回大会発表要旨』 1960.4.
- 35) 宮川芳照 「弥生時代 銅鐸」『大口町史』1982.
- 36) 後藤守一 「駿河浮島村出土の小銅鐸」『考古学雑誌 23-4』 1933.4.
- 37) 袋井市教育委員会 「愛野向山古墳群B群・愛野向山遺跡現地説明会資料」 1980.  
資料の入手および現地の見学にあたっては松井一明氏にお世話になった。
- 38) 松阪市教育委員会 「草山遺跡発掘調査月報 No.10」1985. 3.  
資料の入手にあたっては杉谷政樹氏にお世話になった。
- 39) 註23eに同じ
- 40) 鈕が扁平でなく、鱗を有しないものを総称する。細分が可能である。
- 41) 形態・出土地により細分が可能である。
- 42) 3例のみであるが、鐸身の文様の有無等による細分が可能と思われる。特に、川焼台2号鐸と田間鐸とは、形状的に類似する。
- 43) 浅利幸一 「千葉県市原市天神台遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌 68-3』 1983.2.
- 44) 田中新史 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代 63』 1977.12.
- 45) 田中新史 「出現期古墳の理解と展望—神門五号墳の調査と関連して—」 『古代 77』 1984.6.
- 46) 杉原荘介 「弥生式文化遺跡調査の大勢」『日本考古学協会年報 1』 1951.10.
- 47) 伊藤秀吉 「銅鐸の発見された海老名町本郷遺跡」『月刊文化財』 1971.8.  
富士ゼロックス株式会社「海老名本郷遺跡」 1979.1.
- 48) 名越・甲斐 「鳥取県東郷町出土の小銅鐸」『考古学雑誌 59-2』 1973.11.
- 49) 三木文雄「小銅鐸の系譜」『MUSEUM 184』 1966.7.
- 50) 丸山・平田 「須玖・岡本遺跡」『春日市文化財調査報告書 7』 1980.3.
- 51) 小田富士雄 「多武尾遺跡調査概報」 大分市教育委員会 1982.  
(第2班 千原台事務所)

## 有吉北貝塚における中世土壙墓とその出土遺物

——中世初期土壙墓の様相について——

笹 生 衛

### はじめに

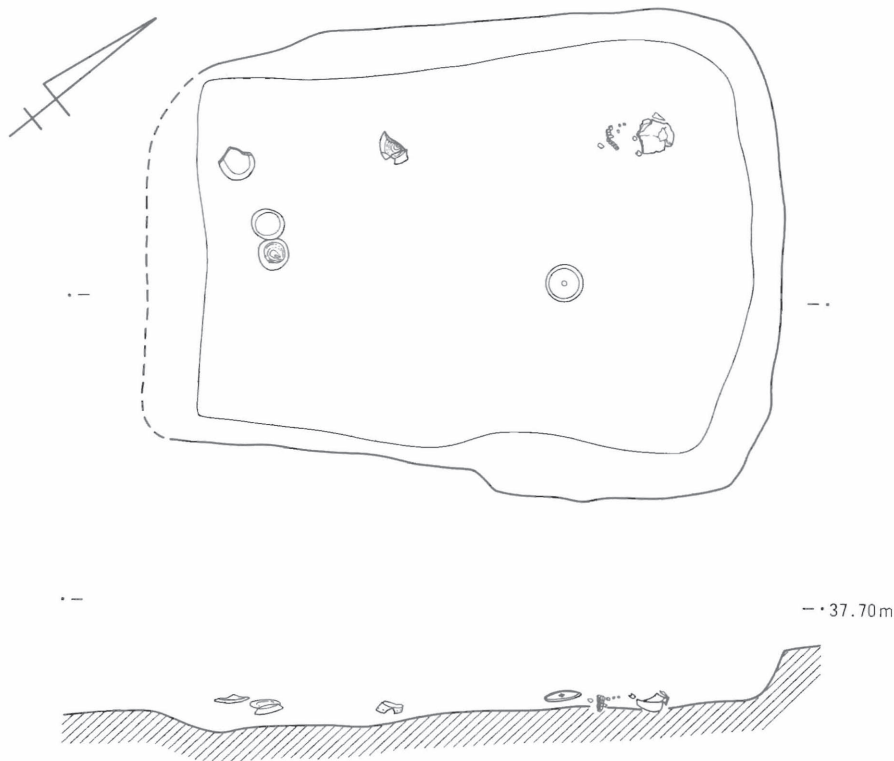
昭和60年度の有吉北貝塚の発掘調査により中世初期の土壙墓が発見され、そこからは、和鏡を始めとする数点の遺物が出土した。中世初期の土壙墓の発見例は、千葉県下においては、まだ少なく、その細かな様相については、殆ど不明であると言える。そこで、ここでは有吉北貝塚で発見された土壙墓と出土遺物の紹介をすると同時に、今回報告する土壙墓のように和鏡が出土した土壙墓の様相、性格についても若干の考察を行ってみること

にしたい。

### 2. 土壙墓の概要と遺物出土状況(第1図)

土壙墓は、台地南側の支谷に面する台地上で、平坦部から緩斜面に移行する標高約38mほどの地点に立地している。土壙墓が発見された地点は、鬼高期の住居跡が集中している場所であり、土壙墓は、重複した2軒の住居跡の覆土中に掘り込まれていた。

土壙墓の平面プランは、約1.2m×1.6mの長方



第1図 土壌墓内遺物出土状況



形を呈しており、壁は、ゆるやかに立ち上っている。

遺物としては、人骨、和鏡、カワラケ小皿4枚が出土している。

人骨は頭蓋骨と顎骨の一部のみしか検出されていないが、頭を北からやや東の方向に向け、顔を土壌底に接するように俯せの形で埋葬されている。

和鏡は遺体の背中付近と思われる場所から、鏡面を下にして出土している。また、カワラケ小皿4枚は、土壌南西端部付近、つまり遺体の足元と思われる場所に、まとめて置かれた形で出土した。

なお、和鏡とカワラケ小皿については、人骨とは異り、土壌底よりレベル的にやや浮いた位置から出土している。このような出土状況から考えて、和鏡とカワラケ小皿は、遺体を土壌内に安置した後、埋葬の過程において埋納された可能性が考え

られる。

### 3. 出土遺物について

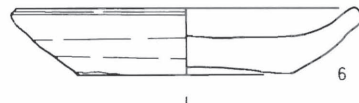
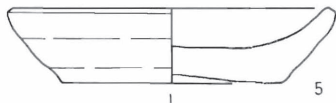
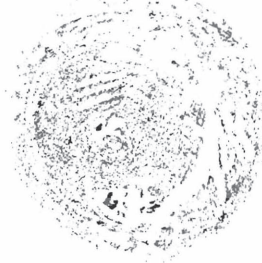
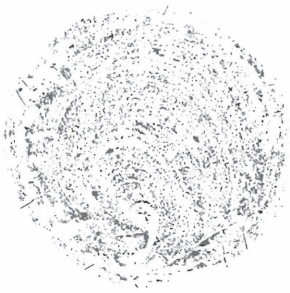
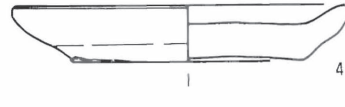
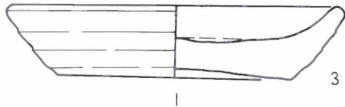
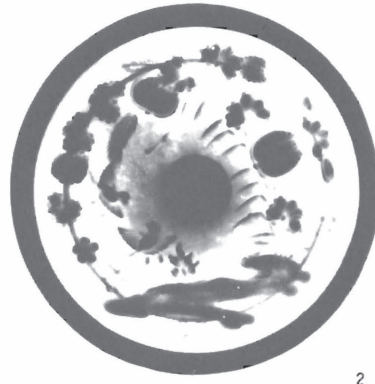
#### カワラケ

出土したカワラケは、その形態、胎土等の特徴から2型式、3類型に分類できる。

A 類—底径に対して、やや器高の高い杯形を呈するものである。成形は右回転のロクロ成形により、ロクロ目は強く、内外面共に明瞭に認められる。底部は回転糸切り無調整である。このA類は、胎土、口唇部の特徴から2類型に細分できる。

A a 類—口唇部が丸く作られる。胎土は暗赤褐色を呈し、やや大粒の砂粒、スコリアを多量に含み、微細な雲母粒も認められる。

第2図3、口径8.6cm、底径6.1cm、器高1.9cm。



第2図 出土遺物  
 1. 和鏡拓影図 2. 和鏡X線写真 3-6. カワラケ実測図

A b類—口唇部断面が方形に作られ、更に口唇部に沈線が巡らされる。胎土は明黄褐色を呈し、黒色粒、小石、雲母粒を多量に含む。

第2図5、口径8.3cm、底径5.8cm、器高2.0cm、6、口径8.9cm、底径5.6cm、器高1.8cm。

B類—底径に対して、器高の低い皿状を呈するもので、底部壁は厚手に作られる。ロクロ目は弱く、不明瞭である。底部は回転糸切り無調整である。胎土は赤褐色を呈し、小石、砂粒、白色針状物質を多量に含む。

第2図4、口径8.7cm、底径6.1cm、器高1.5cm。

これらのカワラケの実年代については、当地域のカワラケ編年が確立していない現在においては明確にし難いが、ここでは他遺跡との比較から実年代を推定してみたい。

前に分類したA・B類のカワラケは、千葉市西屋敷遺跡出土のカワラケ中に、形態的に類似するものが認められる(註1)。この西屋敷遺跡出土のカワラケは、甲崎光彦氏による「南関東における中世土器様相」中ではI期の資料として扱われており、I期には、輸入陶磁器等の年代から12世紀中頃から13世紀代の年代が与えられている(註2)。このことから、今回報告するカワラケA・B類のセットについても同様の年代を想定することが可能かもしれない。

#### 和鏡(第2図1・2)

今回発見された鏡は、鏡背面に主鑄文として甜瓜と二羽の鳥を配した甜瓜双鳥鏡と呼ばれる和鏡である。遺存状況は非常に良好で、鏡全面に薄く緑青が吹いている他には損傷は殆ど認められず、鏡面では部分的に、白銅色に光る鏡表面を見ることが出来る。

各部量法は、鏡面径9.7cm、鏡背面径9.8cm、縁高0.5cm、縁幅0.5cmをそれぞれ測り、また、現重量は123.8gである。鏡面は、その端部で0.15cmほど反る凸面を呈しており、それに続く縁は外傾式厚縁である。鏡背面中央に作られた鈕は、鈕座径2.0cm、高さ0.4cmの菊花座鈕で、鈕孔は径0.15cmの円形を呈する。

鏡背面は、径7.3cmの細線単界圈によって内・外区に別けられるが、主鑄文である甜瓜は、この界

圈を茎に利用して鏡背面に巡らされ、4個の果実及び2花7葉が界圈にそって表現されている。また、鏡背面下部で、界圈上に甜瓜の表現がなされていない部分には流水が表現され、そこから蚊屋吊草が、ゆるやかな曲線を描いて生えており、鏡背面を円形に巡る甜瓜とは対照をなしている。更に、甜瓜によって区画された形の内区には、相対して飛び交う2羽の小鳥と茎を離れた3葉の甜瓜の葉が、各々鈕をめぐって配されている。なお、鏡背面の文様は、細部に到るまで鮮明さを欠かず、鑄崩れや手ズレの痕跡は認められない。

以上のように主鑄文として甜瓜を使用する和鏡は、年代的には鎌倉時代に限られている(註3)。ところで、今回発見された甜瓜双鳥鏡(以後、有吉鏡)の文様構成上の特徴は、界圈を甜瓜の茎に利用し、型式化した図案構成を取っている点にあると言える。界圈を植物の茎に利用して生態描写するこの表現方法は、利園生態描写と呼ばれ、平安時代後期に多く見られる手法であり(註4)、有吉鏡もその典型的な作例の一つである。以上の点から考えると、有吉鏡の作成年代については12世紀後半から13世紀前半の年代が妥当であろうと推定される。また、鏡胎や鏡背面の文様に手ズレ痕が明確に認められない点からして長期間に亘り伝世されたとは考えにくく、そのため、この鏡の埋葬年代についても、その製作年代に近い時期であろうと推測される。

#### 4. 土壌墓内出土和鏡の性格について

今回、有吉北貝塚内で発見された土壌墓と同様に、和鏡が出土した土壌墓の調査例は、現在までに既に数例報告されている。しかし、出土和鏡の土壌墓内における性格、機能については、明確な見解は出されていないようである。そこで、ここでは、和鏡が土壌墓内において果たした機能、意味について若干の考察を行ってみたい。

では、まず県内両総地域で土壌墓中より和鏡の出土した例を、管見に触れた範囲で見てみよう。

佐原市玉造上ノ台遺跡—土壌墓内より和鏡一面が出土している。この和鏡は、頭蓋骨の額に鏡背を接する形で出土しており、遺体埋葬時に額部分に置かれたものと考えられる(註5)。鏡式は山吹双鳥鏡で、製作年代は12世紀中～後期とされて

おり(註6)、その埋葬年代も、製作年代との隔りを考慮しても13世紀前半頃までと推定して大過ないであろう。

佐原市吉原三王遺跡一方形土壙内より和鏡1面が、鉄製鋏、鉄製毛抜、短刀、青銅製蓋を伴う青白磁合子と共に青磁椀上に置かれた形で出土している(註7)。報告者は、和鏡を含めたこれらの遺物を経塚埋納遺物としているが、そこには積極的に経塚埋納品とすべき遺物は見当たらない。したがって、この方形土壙は、土壙墓として考える方が妥当であろう。出土した和鏡は、前述の上ノ台遺跡例と同様の山吹双鳥鏡で、その土壙墓への埋葬年代は、伴出した青磁椀・青白磁合子の年代から考えても12世紀後半頃と考えてよいであろう(註8)。

市原市草刈遺跡(F区)一黒色土層中より紙に包まれた和鏡1面と短刀が出土している(註9)。黒色土層中で明確なプランは確認されていないが、和鏡と短刀が出土した遺構は、土壙墓の可能性が考えられる。和鏡の鏡式は、紙等の付着物により鏡背主鏝文が不明瞭なため不明である。しかし縁が外傾式厚縁である点から考えて、その製作年代は13世紀前後である可能性が高い。

市原市上総国分尼寺跡一上総国分尼寺寺域内の土壙墓内より和鏡1面が出土している(註10)。この土壙墓からは、和鏡の他にも人骨2体(火葬1体・土葬1体)、不明鉄製品、鈴、植物質製念珠、内黒高台付椀等多数の遺物が出土している。出土した和鏡は、瑞花双鳳八稜鏡で、平安後期の製品と考えられる(註11)。土壙墓の埋葬年代については、伴出遺物の分析を待たなければならない。しかし、土壙墓が尼寺々域内に位置する所から、その埋葬は尼寺主要部の機能停止後と思われ、また和鏡の年代を堪案すれば、土壙墓埋葬年代は11世紀～12世紀頃であろう。

市原市(北)アラク遺跡一土壙墓内より、水晶製念珠、カワラケ小皿と共に和鏡1面が出土している(註12)。和鏡は、鏡背面に菊花と双鳥を主鏝文として表現した菊花双鳥鏡とでも呼べるものである。鏡背面の文様構成は、文治五年(1189年)銘経筒に伴出した菊籬双鳥鏡(京都府与謝郡府中村龍神社蔵。註3所載)に非常に類似しており、その製作・埋葬年代も文治五年に近い年代、即ち12世紀末から13世紀初頭頃までの間と考えてよい

であろう。

以上管見に触れた範囲で、両総地域における土壙墓内の和鏡出土例を概観してみた。以上の5例に有吉北貝塚の例を加えた6例を見た場合、その埋葬年代は、11世紀から13世紀の間、特に12世紀後半～13世紀前半に集中するという傾向を示していることがわかる。

では、以上の土壙墓内における鏡の機能についてはどうであろうか。そこで、上述の和鏡出土例を、伴出遺物と出土状況から分類すると、以下の3類型に分類することが可能である。

A類一和鏡が短刀、もしくは毛抜、小鋏、合子等と共に出土するもので、吉原三王遺跡や草刈遺跡(F区)の例がこれに当る(註13)。

B類一和鏡にカワラケ小皿や少量の土器類が伴うもので、有吉北貝塚、(北)アラク遺跡、上総国分尼跡の各例がこれに相当する(註14)。

C類一土壙墓内より和鏡が単独で出土するもので、玉造上ノ台遺跡例がこれに当る(註15)。

これら3類型は、土壙墓内における和鏡の機能、性格を各々ある程度反映していると考えられる。

まずA類は、短刀や毛抜、合子等を伴出する点を特徴としている。和鏡と毛抜、合子のセットは、10世紀代のもと思われる平安京右京三条三坊内木棺墓中より皮製折敷に置かれた状態で出土しているが、これらの遺物は、木棺墓中に納められた化粧道具のセットとして扱われている(註16)。この平安京内木棺墓例と吉原三王遺跡例とを比較した場合、和鏡の伴出遺物には共通点を認めることができる。このことから考えて、吉原三王遺跡出土の和鏡は、毛抜、合子と共に化粧道具のセットを構成するものであったとも推定できる。しかし、その一方で、和鏡と短刀、もしくは和鏡と合子、鋏、毛抜等のセットは、経塚埋納品と共通するものでもある(註17)。したがって、A類に属する土壙墓の埋葬時において、経塚埋納時に行われる供養儀礼に類似した葬送儀礼が行われた可能性は高い。つまり、A類に見られる和鏡を中心としたセットは、単なる化粧道具ではなく、呪術的要素を強く持っていると考えられ、その性格は経塚埋納品と

類似するものであると言えよう。

B類は、少数の土器類を伴う点に特徴があるが、その内でも有吉北貝塚例と(北)アラク遺跡例は、日常什器とは考えにくいカワラケ小皿が各々相伴しており、遺体埋葬時に和鏡とカワラケ小皿を使用して何等かの葬送儀礼が行われた可能性が考えられる。

一方、和鏡が単独で出土するC類においては、出土状況により、和鏡の性格は大きく左右されると考えられる。しかし、玉造上ノ台遺跡例のように、遺体の額に置かれるという特殊な出土状況から考えて、C類に含まれる和鏡例にも少なからず呪術的性格を認めざるを得ないであろう。

以上、土壌墓出土の和鏡の性格、機能について分析を試みてみた。その結果、土壌墓内出土の和鏡には、A類のように経塚埋納品と共通する性格を持つ例が存在すると同時に、それ以外の呪術的性格を強く帯びるB、C類のような例も抽出可能であることが判明したと言えよう。

## 5. 鏡と葬送儀礼について

葬送儀礼は、言うまでもなく死者を中心として行われる宗教行為であるが、その内容は、死者もしくは遺族の個人レベルでの信仰心意によって強く規制されるものでもある。では、このような葬送儀礼の中において、前節で見たような土壌墓出土和鏡の呪術的性格は、どのようにして位置づけられるであろうか。

和鏡の出土した土壌墓例が集中する平安時代末期、12世紀頃においても、神祇、仏教、陰陽道の各信仰の中で、鏡は主要な祭具の一つとして扱われている。そして、これら各信仰の内でも、平安後期段階で、個人信仰のレベルにおいて重要な役割を果たしたのは、仏教、中でも浄土教信仰と陰陽道信仰であった(註18)。

ところで、土壌墓内における和鏡の出土類型中のA類は、経塚埋納品との間に近似した性格を持っていることは指摘したが、経塚造営は、その盛期である12世紀の時点で、浄土教と深い関連を持っていたことに注意しなければならない(註19)。そして、また、和鏡と短刀または、合子、毛抜等といったA類の土壌墓出土品と共通する品々を、経塚へ納める時期は、まさに12世紀を中心とする経

塚造営の盛期である点にも注目したい(註20)。以上の点から経塚中へ、和鏡と短刀、合子等の品々を納める行為は、ある程度、浄土教との関連を持っていたのではないかと予想される。このように考えてくると、12世紀段階で、経塚と共通する和鏡の出土状況を示すA類土壌墓にも、浄土教との関連を推定することができる。そして、A類に見られるような和鏡の土壌墓内での出土例は、地方における中世浄土教葬制の先駆的存在として位置づけることができるのではなかろうか。

では、次に、浄土教以外で、個人信仰の面で中心的存在であった陰陽道信仰について見てみよう。陰陽道信仰は、その形成期である9世紀後半～10世紀段階以来、穢の予防及び処理を、その主な課題の一つとしていたと言える(註21)。平安時代後期においては、日常生活の中にも種々多様な穢が存在し、それが日常生活そのものを大きく制約していたが、中でも死に関する穢、即ち死穢は、最も重大な穢であったことは、改めて言うまでもない。そして、この死穢に対処するために陰陽道信仰が、少なからず葬送儀礼に関与していたと予想される。この点に関しては、既に岡田荘司氏により詳細な研究が行われている。それによると、葬送儀礼としての陰陽道祭祀は、『吏部王記』天慶8年(945年)2月6日条に「斬草祭」の名を見ることができ、更に『小右記』長保元年(999年)10月10日条には、墓改葬に伴う地鎮を陰陽師が行っている記事を見ることができる。また、降って『吾妻鏡』によれば、嘉禄元年(1225年)7月12日には北条政子の葬儀を、前陰陽助親職朝臣が行っている(註22)。このように、葬送儀礼としての陰陽道祭祀はその名称や記事を、文献資料中に幾つか見ることができ、その他にも独立した陰陽道祭祀以外に、何等かの形で葬送儀礼中に陰陽道信仰が関与していたと推測される(註23)。

ところで、陰陽道祭祀においては、鏡と衣が、主要祭具である撫物として使用される場合が多い。特に、鏡を使用する祭祀には、属星祭、螢惑星祭を始めとする星辰の祭祀が多いとされているが、その他にも高山祭、天地災変祭、赤利病祭等の災害や穢に対処する祭祀、または天曹地府祭、泰山府君祭のような冥府関連の祭祀においても鏡は祭具として多用されている(註24)。このように見て

くると、最も重大な穢である死穢に対処する陰陽道葬祭においても鏡が祭具として使用されていた可能性は高いと考えられる。

そこで思い当たるのが、B・C類土壙墓出土の和鏡である。B類土壙墓の中で、和鏡と共に念珠が出土した上総国分尼寺や（北）アラク遺跡例は、その立地する場所柄、仏教との関連を考えさせるが、これらの例もその他のB・C類土壙墓例と同様に、和鏡自体に特別な呪術的要素を認めるものである。つまり、B・C類土壙墓の埋葬時もしくは、その葬送儀礼の時点において、和鏡が主要な祭具として使用されていたと考えられ、このような和鏡の使用法は、陰陽道祭祀との強い関連性が推測される。また、B・C類土壙墓が、営まれたと考えられる12世紀後半頃には、陰陽道祭祀が、中央、地方共に、盛に行われていたと思われる(註25)。以上の諸点から考えると、B・C類土壙墓は、その埋葬時には、陰陽道の要素を備えた葬送儀礼が行われた可能性が考えられ、そこから出土する和鏡は、陰陽道葬祭の主要祭具として位置づけることができるのではなかろうか。しかし、B・C類土壙墓の葬送儀礼は、純粋な形での陰陽道葬祭に限定されるとは考えられず、B類中の上総国分尼寺跡例や（北）アラク遺跡例のように、仏教信仰と習合した形のものも多分に存在していたことを付け加えておかなければならない。

## 6. おわりに

以上、有吉北貝塚内の中世土壙墓とその出土遺物の紹介を兼ねて、中世初期土壙墓の様相と、そこから出土する和鏡の性格について若干の考察を試みてみたが、その結果についてまとめておこう。(1)和鏡が出土する土壙墓は、千葉県両総地域においては、11世紀から13世紀にかけて多く見られ、特に12世紀後半～13世紀前半に集中するという傾向を示している。(2)土壙墓内における和鏡の機能、性格については、経塚埋納品と共通するものと、和鏡に特別な呪術的要素を認めるものが存在する。そして、前者は仏教葬制、特に浄土教葬制との、後者は陰陽道葬祭との関連を、各々想定することが可能である。このように見てくると、この両総地域において

は12世紀後半～13世紀前半という時期は、古代末期的な陰陽道葬祭と中世的な浄土教葬制とが混在する、葬制の過渡期的様相を示していると言える。そして、以上のような様相は、地方を遊行する浄土教系の聖や『今昔物語』等に登場する陰陽師、陰陽僧の動行とも大きく関連していたと思われる(註26)。また、一方では、この時期の土壙墓の立地条件を分析することにより、当時の地方における穢意識の問題にも何等かのヒントが得られるのではないかと考えている(註27)。

なお、今回の考察においては、類例の集成や資料の分析が不十分であるため、論旨に不明瞭な点が多々見られる結果となってしまった。しかし、今後、資料の増加を待って、上述したような観点から古代末期から中世初期の葬制について再考を行ってみたい。

付記—この小稿を草するに当り、下記の方々より多くの御教示を載いた。記して感謝の意を表したい。

(財)市原市文化財センター、宮本敬一氏、浅利幸一氏。

千葉東南部事務所 関口達彦氏、西口 徹氏、岡田光広氏。千原台事務所 榊原弘二氏。萱田事務所 藤岡孝司氏。

## 註

- 1) 矢戸三男・谷句他 『千葉市西屋敷遺跡』(助)千葉県文化財センター、日本道路公団東京第1建設局 1979.
- 2) 甲崎光彦 「南関東における中世土器様相」『シンポジウム、古代末期～中世における在系土器の諸問題』「神奈川考古」第21号 神奈川考古同人会 1986.
- 3) 広瀬都巽 『和鏡の研究』 角川書店 1974.
- 4) 同3)
- 5) 五味美里 「千葉県佐原市玉造上の台遺跡出土の和鏡」『考古学ジャーナル』220号 1983. 7月号
- 6) 同5)
- 7) 岡田光広他 「佐原市吉原三王遺跡出土遺物について」『研究連絡誌』7・8合併号 (助)千葉県文化財センター 1984.

- 8) 出土した青磁碗は、櫛描文等の特徴から同安窯系のもと考えられる。この同安窯系の青磁碗は、関東地方には12世紀末～13世紀前半にかけて多く流入している所から、この土壙墓の年代は13世紀前半にまで降る可能性も考えられる。服部実喜「関東地方出土の輸入陶磁器について」、「神奈川考古」第20号、1985。
- 9) 遺物の出土状況に関しては、榊原弘二氏より御教示を受けた。また、遺物は、榊原氏の御好意により実見させて頂いた。
- 10) 上総国分尼寺跡及び(北)アラク遺跡に関しては、宮本敬一氏、浅利幸一氏より御教示を受けた。また、遺物は、両氏の御好意により実見させて頂いた。
- 11) 同3)
- 12) 同10)
- 13) この他に、A類に属すると思われる例としては、八千代市井戸向遺跡の例がある。ここでは、土壙墓と思われる遺構中より12世紀頃のものと考えられる和鏡と短刀が出土しているが、詳細は報告書を待ちたい。以上は、藤岡孝司氏の御教示による。
- 14) B類に類似する例としては、千葉市西屋敷遺跡の土壙墓がある。ここでは、和鏡は出土していないが、カワラケと方形石板を使用して葬送儀礼を行った形跡が確認されている。同1)。
- 15) C類に類似する例としては、千葉市西屋敷遺跡の地下式坑を挙げる事ができる。地下式坑内には、和鏡1面のみが埋納されていた。出土和鏡は、松樹双雀鏡で、鎌倉時代から室町時代初期の年代が与えられる。同1)。
- 16) 寺島孝一「平安京の墓」「季刊考古学」第9号 1984。
- 17) 三宅敏之「経塚の遺物」『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚 雄山閣 1977
- 18) 速水侑 『浄土信仰論』 雄山閣 1978。  
岡田荘司「陰陽道祭祀の成立と展開」『国学院大学日本文化研究所紀要』第54集 1985。
- 19) 保坂三郎 「経塚概論」 同17)  
奥村秀雄 「経塚」『新版考古学講座』8巻特論 雄山閣 1979。
- 20) 同17)
- 21) 岡田荘司 前掲論文
- 22) 同21)
- 23) 直接葬礼に関連する陰陽道祭祀としては、上述の例の他に、「招魂祭」を挙げることができる。この祭祀は、死者の魂を招び返し、死者の復活を願うもので、『中右記』等にその名が見られる。また、北条政子以外で、鎌倉時代における陰陽道葬祭例としては、北条義時の葬儀も、陰陽師の手により行われる予定であったらしい。村山修一、『日本陰陽道史総説』 塙書房 1981。
- 24) 同21)
- 25) 村山修一 前掲書  
地方における陰陽道祭祀は、『今昔物語』巻第26、第21、「修行者、人の家に行き、女主を祓ひて死にし語」等の記述から見ても、12世紀段階でかなり地方へも浸透していたことがわかる。
- 26) 奥村秀雄氏は、前掲書の中で、地方の経塚造営は遊行聖の手によるものであった可能性を指摘している。
- 27) 高取正男氏は、『神道の成立』の中で、穢意識の成立について詳述しているが、今回報告したような土壙墓と集落等との立地関係を分析することにより、当時の地方の穢意識を復元することが可能であろう。

#### 参考文献

- 前田洋子 「和鏡の用途の展開について」  
—出土鏡、水中検出鏡を中心として—、北山茂夫追悼日本史学論集『歴史における政治と民衆』 1986。
- 高取正男 『神道の成立』 平凡社 1979。
- 上井久義他 『葬送墓制研究集成』 第5巻 墓の歴史 名著出版 1979。  
(第2班 千葉東南部事務所)